

## 4代ダライ治下におけるチベット仏教史の展開

矢崎正見

### はしがき

4代ダライ、ユンテン・ギヤムツォ (Yon-tan rgya-mtsho) は1589年、チベット暦の so-glañ (己丑) の年、中国明朝、神宗代の万暦17年に出生、1616年、me-ḥbrug (丙辰)、万暦44年、すなわち清の太祖、天命元年に死亡した。彼の27年間に亘る生涯は、中国における万暦年間であり、世にいう万暦版のチベット大蔵経の集成がなされたのを、万暦30年、乃至33年とするなら、ユンテン14歳、若しくは17歳の時であり、ジツメ (Hjigs-med nam-mkhañ) の“蒙古仏教史 (Chen-po hor-gyi-yul du dam-paḥi-chos ji-ltar byuñ-ba)”における記述によれば、彼は14歳で蒙古の地を離れ、ラサ (Lha-sa, 拉薩) に赴いた<sup>1)</sup>とあるから、ユンテンがウ (Dbus, 衛) の地方を中心とするチベットに4代ダライとして迎え入れられた頃といえるのである。

さきに<sup>2)</sup>、万暦版集成の時期とされる中国万暦年間の時代相と、この期間における明蔵両国の交流等について、主として漢文資料により、これを探ったが、本稿においてはチベット・蒙古等の諸資料によって、この時代のチベット仏教史の実態を究明し、もってここに、世にいう万暦版集成の背景に迫ろうとするものである。

### (1)

チベットにおけるダライラマ制はツォンカパ (Tson-kha-pa, 1357~1419) の高弟の1人であるゲンドン・ドゥブ (Dge-ḥduñ grub, 1391~1475) が初代法王となって以来、1959年の中共によるいわゆるチベット解放后、現在はインドに亡命中の第14代テンジン (Bstan-ḥdsin rgya-mtsho, 1935—) まで、約600年に亘る歴史を有するが、この制度がチベットの地において確たる根をおろすに到ったその揺籃期において、ダライとしての活動を注目されねばならないのは第3代法王ソーナム (Bsod-nams rgya-mtsho, 1543~1588) と第5代ロサン (Blo-bzañ rgyam-tsho, 1617~1682) である。

第3代ソーナムについて、ジツメの“蒙古仏教史”が記述する処によると、

「de-nas rim-gyis phebs-pa dañ sa-stag-lohi hor zla-lña paḥi tshes bco-lñaḥi ñin, …… Al-than-rgyal-po ñid, mthah ḥkhob mun-paḥi gliñ dkar-poru byas-paḥi brda chad-du gos dkar-po gsol te ḥkhor khri-phrag tsam dañ, de ñid kyi btsun-moḥañ ḥkhor mañ-po dañ bcas te ḥoñs tas, mtshod-yon mjal-baḥi dgaḥ-ston gyi thog-mar, dñul-srañ lña-brgya las grub-paḥi mañḍala, gsal gyi phor-pa yul-dbus kyi bre tshad soñ-ba shig rin-po-ches dkañ-ba sogs ḥbul-ba tshad med-pa phul. …… de-nas rgyal-pos gser-gyi phor-pa chen-po mu-tig gis bkañ-ba sogs yo-byad sin-tu legs mañ dañ bsas tālaḥi bla-ma vajra-dhāra shes khyab bdag-rdo-rje ḥchañ gi las ka-phul<sup>3)</sup>。

ついで次第して、ツチノエトラ (1578) の年の蒙古暦5月の15日に……アルタン汗自身、辺境の未開にして暗黒の国土を純白とせんためのしるしとして、白き衣をまとい、10,000人程の眷属と、王自身の妃も亦、多くの眷属を従えて来り、而して、奉獻のための会見のもて

なしの始めに、五百銀によって作れる曼荼羅、黄金の碗の中国の単位にて1ツェションの宝石を満せるもの等、無量のものゝ賜りたり。……又、汗は黄金の大碗の真珠の満ちたるもの等の什器にして、誠に善美なるものなど、数多くと、ターライラマ・ヴァジュラダラ、すなわちヴィシヌ持金剛なる称号を奉りたり。」

とあり、同じく、三代ダライとアルタンの会見について、“蒙古源流”によると、

「それより、戊寅の年、聖謝一切喇嘛の英明をたたえて、大衆はいたく喜びしに……アルタン・ハンの昏暗なる部洲を輝かす兆芽に白衣をき、白馬にうち乗り、先頭に立ちし汗は、諾延、ジュンゲギン・フジン等万人をひきいて、ふたたび聖喇嘛を迎えて、チャブチャルなる廟宇に彼をみちびき、降りたち、かしこに宴をひらかせたまいぬ。このとき、会見の儀礼によりて、五百兩の銀をもつてつくりし七珍八宝、または三十兩の金碗のうちに宝石を満盛し、良緞を各々十端・五色の緞の各色のものを、各々百端、各色の宝石をちりばめし金鞍をおける白馬を十頭、五千の幣帛、五千の馬匹、獸畜、すべて万件の贅禮物を呈献して……従来のトゥベトの三汗とモンゴ人のフビラ・イ・ハンの時代の旧例の書物にあわせて、十類の善福經の法会を創立せしめ、聖識一切・ワチル・ダラ・ダライ・ラマなる称号を呈し……<sup>4)</sup>」

「歳次戊寅、大聖瞻仰聖識一切喇嘛、皆甚歡悅……阿勤坦等照明昏暗部洲、首先穿白衣、乘白馬而導引也。汗、同諾延金福晉等、帶領万人、又迎至於察卜恰勤廟、筵宴行見礼、以五百兩銀所造七珍八宝、三十兩金碗內滿盛宝石、上好緞十端、五色緞百端各色、宝石鑲嵌金鞍白馬十四、幣帛五十四、馬匹牲畜五千疋、共万件呈献……従前土伯特之三汗並蒙古胡必賚汗時旧例、創立十善福經之政、尊以聖識一切瓦齊爾達賴喇嘛之号……<sup>5)</sup>。」

と殆んど全同の表現によって、アルタン汗から3代ソーナムに対し、「ダライラマ」なる称号が呈せられた事実を記している。

第5代ダライ、ロサンについては、彼とグシ汗（固実汗、顧実汗、Gu-śri ge-gen han, Bstansin chos-rgyal, 1582~1659）との結びつきについて、同じくジツメには

「dehi tshe dbus-gtsaṅ gi rgyal-po ni sde-srid-gtsaṅ po win ciñ, des karma-pa bla-ma mchod kyi gtso-bor bzuñ te dge-lugs-pyogs la bsam-sbyor log-pa mañ-du byas par brten rgyal-po hdi dpuñ gi tshogs chen-po dañ-bcas te dbus-gtsaṅ gi phyogs su bteg, gtsaṅ-paḥi dpuñ mthaḥ dag bcom ste gtsaṅ-pa rgyal blon bzuñ nas dbus kyi steḥu gshis-kar bcug ciñ dbus-gtsaṅ gi phyogs-kun mñah-log tu bsdu. bod-chol-kha-gsum gyi rgyal-por gyur te,……dbus-gtsaṅ gi mñah-ḥbañs mthaḥ dag rgyal-dbañ-thams-cad-mkhyenpar-phul te,……<sup>6)</sup>

……その時、ウ・ツァンの王はデシツァンポであつて、彼はカルマ派のラマを尊崇の主とすることをなし、ゲルク派等に対し悪しき計画を大いに策したるにより、この王（グシ汗）大軍団をもってウ・ツァンの方面に來りて、ツァンパの無量の軍等を打破り、ツァンの王・高官を捕え、ウのネウと呼ぶ故地にある牢に押込め、ウ・ツァンの総ての地域を勢力下に収めたり。チベット3州の王となりて、……ウ・ツァンの無量の人民等を勝主一切智者（5代ダライ、ロサン）に献じ……」

とある。同様の記述は魏源の“聖武記”によると、

「固始汗とはもと厄魯特部にして、明季において東二部を吞併し、青海の地広きを以て子孫をして游牧せしむ。……衛の地は則、第巴、達賴を奉じて之に居る。蔵地は則、蔵巴汗之に居る。第巴の桑結と曰う者、蔵巴汗と相能からず。拉蔵は部衆を虐し、黄教を毀つと。師は固始汗に乞うて之を翦滅し、其地を以て班禪に居らしめ、達賴と二蔵を分主し、尽く紅帽花

帽の諸法王を逐う。事は崇徳十（八？～1643）年に在り<sup>7)</sup>。」

と述べている。

チベットにおけるいわゆるダライラマの制度について、3代ダライがアルタンからダライの称号を贈られたこと、ならびに5代ダライが蒙古のグシ汗から中央チベットにおける統治権を呈せられた事によって、活仏にして転生者であるダライが全チベットにおいて法王即国王として君臨し得るが如き、いわゆるダライラマ制の成立を見たときと広く云われている。そして、上に引用した記述はそのことに関する歴史的事実を示すものである。アルタンから3代ダライに贈られたダライなる称号がチベット本土では、あるいはチベット人の間では余り用いられず、逆にチベット以外の世界で広く知られるに至ったという事実があること、またグシ汗が5代に譲渡したものは、必ずしもチベット全土に亘る統治権ではなく、ウ地方を中心としてゲルク派 (Dge-lugs-pa) を公認し、人々がゲルク派に対する信仰を懐くことを保障したに過ぎないのであろうが<sup>8)</sup>、兎も角も、ダライラマ制度成立史上、3代と5代とはその活躍に顕著なるものがあつたダライと云うべきであろう。

この2人のダライに対して、4代ダライ・ユンテンはどのように位置づけられるのであろうか。3代と5代の間に位置して、彼の治績には特に見るべきものもなく、彼がダライとして生存中、チベット国内に特別な事件もなかったため、歴代ダライ中、ややもすると傑出したダライとは見られていないのが現実である。しかしながら、チベットにおけるダライの制が蒙古諸汗との深い関係によって成立した事実から見る時、彼が蒙古の地にアルタン汗の系統から出生したという点は注目しなければならない。彼の出生はジツメによると、セング・ドゥグルン (Sei-ge dū ga-run, 図古隆汗, 1538～) の長子<sup>9)</sup>、スーミル・ターイチン・ホン台吉 (Sūmir tāhi-ci-hiñ hvon thāhi-ci, 蘇密爾岱青) とその妃 (btsun-mo) ターレー (Tā-re, パーハン・チョラ (Pāhan cvo-la) の子として己丑 (sa-mo glañ, 1589) に出生したとある<sup>10)</sup>。そして、セングはアルタンの長子であり、セングの6人の子のうち、スーミルは第4代天王自在者ヨンデンギャムツォペサンポ (lha-rgyal dbañ rin-po che bshi-pa, Yon-tan rgya-mtsho dpal-bzañ-po) をその子とする点をもって知られる<sup>11)</sup>と述べている。

4代ダライの治下における出来事、ならびに彼の治世について特記すべきことがないと一般に云われていること、前述の通りであるが、この時期の、すなわちダライラマ制の揺籃期において、アルタン汗の血をひく蒙古系のダライが出現した事が、次の5代ダライとグシ汗の結びつきを容易にし、また、当時における蒙藏関係にも、更にはウ・ツァンを中心とするチベット国内の問題や、チベット仏教各団におけるゲルク派の地位等にも大きく影響する処があつたと考えられるのである。同じくジツメはユンテンの出現に対する蒙古側の雰囲気として、

「shva-ser gyi bstan-paḥi srol btsugs te rgyal-dbañ de ñid sog-yul du mya-nan-las-ḥdas-paḥi sprul-sku rgyal-dbañ bshi-pa yon-tan rgya-mtsho hor-yul du sku ḥkhrūns-pas lhag-par sog-yul du bstan-pa dar-ba la sman-par gyur<sup>12)</sup>。

黄帽派の教流を確立し、而して、かの勝主（第3代ダライ）自身、蒙古国に般涅槃の化身たる第4代勝主ユンテン・ギャムツォとして蒙古の地に御身御出生されたので、まことに蒙古国における教流々布のための医師となつたのである。」

と述べている。

## (2)

4代ユンテンが、ダライラマとしてウの中心地ラサに入ったのは彼、14歳の時（1603）であつた。それ以後、示寂の1616年までの14年間に亘る彼の治世中、蒙藏関係はどのような展開を見

たのであろうか。

アルタン汗はジゲメによると、1507年、丁卯 (me-yos) の年、ダヤン (Pā-thvo-mun-he tā-yan) 汗の子として生れ、1583年、癸未 (sa-khyi) の年、77歳で浄土に赴いたとされている<sup>13)</sup>。彼が明朝の北辺を脅かし、河北や山西地方の奥深くまで侵攻したのは16世紀の20年代であったが、1570年、明朝の隆慶4年には穆宗と和議が成立し、順義王に封ぜられたのである。この後、蒙古民族は徒らに明朝と事を構えることなく、馬市による交易関係も成立し、蒙古の人々のなかには遊牧生活を捨てて、馬市の周辺に定住し、農耕に従事する者も現われた。かくて、蒙古民族の勢力は外蒙古の経綸と中央アジアに対する進出へと向けられたのであった。アルタン自身もソーナムにダライの称号を贈った5年前の癸酉の年 (1573) にチベットに進攻しているのである。

「御年、68歳に、癸酉の年にサハリヤン・トゥベト (薩哈連・図伯特) 地方に行兵して上下部落・シラ・オイゴル・アムド・キャミ (沙喇・衛郭爾・阿木多・喀木) のアリ・サガルチスキバ (阿哩・薩噶爾斯奇巴)・キャルブ・ルムブム (喀嚕ト・擒布太)・サルタンゲ・サリク・ケブ (薩爾唐・薩噶克・克ト) の三諾延、大衆、俗黎を収め、よりてアリク・ラマ (阿哩克喇嘛)、グミ・スギャ・バクシ (固密蘇噶巴克実) の両者を首長として一同投降しぬ<sup>14)</sup>。」

そして、この結果、蒙古民族は喀木の地と青海地方を完全に手中に収め得たのであった。このアルタンの東部チベットの侵攻と、時を隔てること約70年、5代ダライの治下、グシ汗がウ・ツァン両地方の争いを平定することを目的としてツァンの討伐を行なったのであった。

そもそも、チベット4部について、“清史稿”が記す処によると、アルタンのチベット討伐以後、グシ汗は

「以青海地広、令子孫游牧而喀木康輸其賦。衛地則第巴奉達頼、居之、藏地則藏巴汗居之<sup>15)</sup>。」という行政区分を保っていたが、上述の如く、

「第巴桑結、與藏巴汗不相能。謂其虐部衆、毀黃教、乞師於顧実汗、翦滅之。顧実汗遂以藏地居班禪、留長子<sup>16)</sup>。」

となったのである。すなわち、3代ダライから4代・5代ダライとダライへの交替のなかで、蒙古、特にタタール (Tataru, 韃靼) 部のアルタン汗、ならびに青海のグシ汗の武力によって、衛を残す他の地域は蒙古民族が征圧する処となったのである。が、蒙古によるチベットへのそのような侵寇が単なる武力的侵入のみでなく、蒙古諸汗のラマ教に対する帰依という形をとっている点に、この時期におけるチベットと蒙古との特殊な関係を見ることが出来るのである。特に、アルタン汗と3代ダライ、ソーナムとの結びつき、グシ汗と5代ダライ、ロサンとの関係によって、ダライラマ制はその基礎を確立し得たのであった。勿論、清史等に述べる如く、グシ汗はツァンバ汗討伐後、ツァンの地に4代パンチェン (pañ-chen, 班禪)、ロサンチュキゲムツェン (Blo-bzan, chos kyi rgyal-mtshan, 1569~1662) を居らしめたところから、ダライのみを全チベットにおけるラマ教の中心と考えたわけではなからうが、兎も角も、ラマ教に対する帰依の態度を軸とする蒙藏親交策に終始したのであった。

4代ダライ、ユンテンと蒙古諸汗とが3代ダライとアルタン、5代ダライとグシ汗の如き特殊な関係は持たなかったにせよ、ユンテンの場合も、彼、治下のチベットは3代と5代の間にあって、蒙古との関係により、大いにその親交の実を挙げたものと推測するに難くはない。特に上述の如く、彼がアルタンの血脈を受継ぐものであり、蒙古に出生した点を考えるなら、彼の時代こそチベットと蒙古の民族を超えた一体化が完成した時期と云うことが出来よう。ジゲメ<sup>17)</sup>によってユンテンの伝記を探れば、3歳で出生の地を離れ、嘗てアルタン汗の居城であった帰

化城（帰綏・綏遠）の地に招かれ、この地で習学、14歳の時、ウの地より奉迎使としてシェーラプギェムツェン（Śes-rab rgyal-mtshan）が着城し、これに迎えられてラサに入り、ダライとして法座についた。のち、デプン（Hbras-spun）・ツァン・タシルンブ（Bkra-sis lhun-po、札什倫布）と巡錫し、4代パンチェン、ロッサンに逢い、この地方の靈場を巡った。22歳、25歳とデプンにおいてパンチェンより灌頂、具足戒を受ける等のことがあった。死亡の年の丙辰（1616）3月、明の神宗（Shun-sū wan）より支那に来駕されたしという奉迎使を受けたが、同年12月、年わずか27歳で遷化したと伝えられている。このような彼の伝記中、注目すべき事の1つは蒙古側が彼をその出生地である蒙古に留めようとし、ラサからは彼をウの地に迎えようとする強い意志が働いた事である。すなわち、彼が3歳で帰化城に迎えられ、ここに住するに至った後、ウの地からは大出納官ペデシギヤムツォ（Dpal-ldan rgya-mtsho）と多くの部将達、セラ（Se-ra、色拉）、デプン、ガンデン（Dgaḥ-ldan、甘丹）の三大寺よりそれぞれ奉迎使が来城し、14歳で彼が離城する時にペデンと蒙古王との間に争いがあった事、

「dguñ lo-bcu-bshi ma bshes kyi bar-du chen-po-ḥor gyi ḥgro-ba rnam kyi don-du bshugs te… śes-rab rgyal-mtshan sog-yul du gdan-ḥdren la yoñ-ba dan… rgyal-po rgyal-mo sogs kyi thabs du maḥi sgo nas bśol thabs mdsad kyañ, phyag-mdsod-chen-pos thabs mkhas kyi ḥphrul chen-pos bgegs ras grol-par mdsad de, …」

14歳に至るまで、大蒙古の有情等のために留まれ…ウよりシェーラプギェムツェンが奉迎のため蒙古に來り、王と王妃等は多くの手段によりて妨げられしも、大出納官（ペデン）は大いに手段を講じ、妨害より逃れた…<sup>18)</sup>」

ことが記されている。又、グシ汗によって、ツァンの地を任された4代パンチェンを師として灌頂を受け、具足戒を授けられていること、更に又、特に留意すべきことは、彼の生涯は法王としての修学と布教伝導に終始して居り、蒙古の諸汗との交流は全く記されていない事である。前述の如く、その遷化の年に明の第14代皇帝神宗から奉迎使を受けたのが、彼の生涯における唯一の為政者との交流であった。

ユンテン自身はもとより彼の時代のチベットが蒙古諸汗と干戈を交えることはもとより、特に親交の実を挙げるが如き行跡が見られなかったという事は逆に云えば、彼の時代における蒙蔵の関係は3代ダライとアルタンとの関係を経由して、やや固定化し、それが5代ダライの時代におけるウ・ツァン・カム・青海というチベット4部における統治区分を確立する過渡期と見ることが出来よう。「聖武記」巻第5に

「伝えて第4代に至る。雲丹嘉穆錯と曰う。蒙古凶隆汗族に生る。14歳入蔵して坐牀す。28歳にして示寂す。故に事蹟著しからず。然れども河套・青海・蒙古その戒を守りて敢て鈔掠せず。西辺枕を安んずるもの50余年<sup>19)</sup>。」

とある。正に彼はダライとして、その事蹟に著しきものを持たないダライであった。しかも若年で逝去し、ダライとしての坐牀の年月も短かかったが、然し乍ら、彼の治下は事、蒙蔵関係に関する限り誠に太平であり、ツォンカパ以来の黄教の信仰がチベット本土はもとより、蒙古・青海の地へまで侵透した時代と云えるのである。

### (3)

ユンテン治下の蒙蔵関係が上述の如き状態であったとして、チベット国内、特にウとツァンとの交流や、黄帽派の教勢拡張に伴い、これに対して他の宗派はどのような対応の仕方をなしたのであるうか。特に5代治下、ツァンパ汗とウとの確執が、グシ汗のツァンへの出兵を将来したという事実から考えると、ウとツァン・黄帽派と古派はそれぞれ4代ダライの時代をど

のように迎えたのであろうか。以下、これらの点について若干の考察を進めることとしよう。

ウとツァンの争いは決して地域的な争いではなく、結局の処、ウを中心とするゲルク派とツァン地方を主としてその勢力下に収めるツァンの諸王によって外護されたカルマ派 (Kar-ma-pa) との争いでもあった。しかも、それは単なる宗派間の争いではなく、カルマ派に対抗するゲルク派が、時にはパッモドゥ (Phags-mo-gru) 王朝<sup>20)</sup>に頼り、5代ダライの時代には上述の如く蒙古のグシ汗の武力を裏楯としたのに対し、カルマ派も亦、時としては蒙古諸汗の保護下に入り、更にはツァン王の支持によってゲルク派との教勢拡張を争うという、武力ぐるみの戦いであったのである。かくて、チベット史の多くの場合に見られるが如く、宗派間の抗争が同時にこれを相互に外護し合う武力間の争いでもあるという二重構造を持ったのである。このような構造の典型が5代ダライの治下におけるカルマ派とゲルク派の争い=ツァンパ汗とグシ汗の争いという形で出現したのである。然しながら、5代治下のこのような事件は、この時期に忽然として出現した筈はなく、4代ユンテンの時代にも当然、このような紛争が行われていたのであった<sup>21)</sup>。

本来、カルマ派はカーギユ派 (Bkañ-brgyud-pa) の1分派として、カーギユ派の始祖であるマルパ (Mar-pa, 1012~1097) の孫弟子に当たるガムポパ (Sgam-po-pa) の高弟、ドゥスムケムパ (Dus-gsum mkhyen-pa chos-kyi-grags-pa, 1110~1193) を開祖とする宗派である。ドゥスムが1155年、ラサ北西のツルプ (Hthur-phu) にツツルラルン (Tshu-mtshur lha-luñ) 寺を建立し、ここがカルマ派の本拠ともなり、同時にこの派の本山となっている。この派の学術的特色として、教学そのものの研究よりはどちらかと言えば実践的行、特にタントラ (tantra) の実践を主とした。このような傾向が、この派の第2祖と仰がれるカルマパグシ (Kar-ma pagši, 1204~1283) によって転生ラマの観念が確立され、やがてはこの派の相承形式に転生による化身ラマ制度がとり入れられたのであった。また、政治権力、乃至軍勢力との結びつきとしては、時にはツァン地方の豪族と結び、あるいは蒙古の汗達を保護者とし、特に第5祖デシンシェパ (De-bshin gšegs-pa, 1384~1415) が明の永楽帝に招かれ、その名、デシンは永楽帝から贈られたとされる事<sup>22)</sup>など、明朝との結びつきは顕著な歴史事実である。この派がその勢力を消滅した一因は、主としてツァンの支配者達と手を結んだ紅帽派 (Shwa-dmar-pa) とアムド地方をその中心勢力とする黒帽派 (Shwa-nag-pa) の二派に分かれて、宗派内に争いがあった事と、最終的には上述の如き経緯によってゲルク派に吸収されたのであった。然しながら、ダライラマ制に見られる化身ラマ転生の思想もこの派によって打出されたものであり、政治的・軍事的権力を裏楯としてその教勢を強めるためには、明朝・蒙古諸汗・ツァン地方の豪族と、広くそれらの力を活用すべく努力したのであった。とするなら、5代ダライ、ロサン<sup>23)</sup>の治下、突如としてゲルク派と争って破れた訳ではなく、当然、4代ユンテンの時代にあっても、当時における新興勢力であったゲルク派と既に400年余の歴史を有するカルマ派との間に、学術的なというより、武力による闘争が当然行われたと考えられるのである。

グシ汗によって破れたツァンパ汗デシ (Sde-srid gtsañ-pa, Gtsañ sde-pa) をはじめとして、ツァンの諸王についても同様のことが考えられるのである。5代ダライの時代となって、はじめてカルマ派の外護者としてゲルク派に対して事を構えたわけではなく、当然、4代ダライの治下にあっても、ゲルク派、乃至ダライ政庁に対するツァン地方からの攻撃はあったのである。本来、ツァン王とは呼ばれながらも、ウの中心地ラサでさえ、これが完全にゲルク派の手中に帰したのは5代ダライの時代であり、4代ダライの晩年1611年、ツァンのプンツォ (Phun-tshogs rnam-srgyal) がラサを攻撃し、ここに入城した時、彼は征服者としてラサに到着したのではな

く、寧ろ、自己の領地を訪問したという形をとっているのである<sup>33)</sup>。

上述の“聖武記”の記述にある「西辺枕を安んずるもの五十余年」という表現は、まさに蒙蔵関係については云えるかも知れないが、ツァンとウ、カルマ派とゲルク派については必ずしも「枕を安んずる」状態からは程遠かったのが実態であったのである。14世紀の中葉に興りし、チベット国内における統一の王朝とも呼ぶことの出来たパッモドゥ王朝が衰微の兆しを見せ、一方、ダライラマ制そのものは第3代ソーナムが蒙古王アルタンからダライの称号を贈られたという歴史的な動きのなかで、蒙古諸汗の武力を裏楯としたゲルク派の宗教的基盤は徐々にチベット内外に侵透しつつあったにはせよ、4代ダライ、ユンテン治下のチベット国内には、必ずしも平和が定着したとは云えなかったのである。

### む す び

ユンテン治下のチベット仏教史、あるいはチベット史と呼ぶべきものの展開は、(1)ゲルク派の草創期、特にこの後、約400年に亘り今日に及ぶダライラマ制度がチベットの地に徐々に根をおろしつつあった時期である事、そして特に、(2)ユンテンが蒙古民族の血を引くダライとして、その法王位に即いた事はダライラマ制度、乃至ゲルク派が蒙古諸汗の武力を裏楯として、その教勢を全ラマ教圏に侵透する上で非常に有利であった事、しかし乍ら他面、(3)16世紀末から17世紀初頭にかけてのこの時期は、必ずしもチベット国内が平穏であった訳ではなく、一時期、統一王朝として君臨したパッモドゥ派の衰微後は、カルマ派のゲルク派に対する脅威が増大した事、国際的には(4)蒙蔵の関係はおおむね平穏であったが、(5)明朝とチベットの関係については、明末の中国に対しては、朝貢使の派遣などという形式化した行事は行われたにせよ、それ以外の特殊な交流は、ユンテンの晩年、神宗から奉迎使を受けた事を除いて、ダライ法王庁と明朝との間で行われることはなかった等の事柄が、その骨子となると考えられるのである。

13世紀末、パッパ(Hphags-pa, 1235~1280)の活躍によって、サキヤ(Sa-skya)王朝が忽必烈汗セチェン(Se-chen, 1215~1294)の外護を受けて成立し、そのセチェンの元朝が1367年滅亡して明朝が興起して以後、1つには明からの圧迫を逃れるため蒙古の諸汗と手を結んで、その教勢の維持につとめたチベット仏教の各教団中、14世紀末にはツォンカパによる新教、黄帽派の成立を見、この派の法脈を受継ぐゲルク派によって、ダライラマ制の基礎を作り上げたのであった。そして、初代ダライ、ゲンドゥンの滅後、約100年、ユンテンの時代を迎えたが、この間、チベット大蔵経の開版乃至集成事業として知られるものは、1320年代のナルタン(Snar-than)古版の集成、そして、それに引続いて開版されたと伝えられるツェルパ(Tshal-pa)版、リタン(Li-than)版、更には明朝永楽年間、中国において開版を見たと言われる永楽版、そして今、4代ダライ、ユンテンの時代となって、中国万暦年間に同じく中国において開版されたと伝えられる万暦版などが、その名を留めているのである。これら初期のチベット大蔵経諸版の開版については、何れもその史実性に若干の疑念を持たざるを得ないが、万暦版の場合も、明の万暦帝神宗が何故にチベット大蔵経の開版に思い至ったのか、その意途は不明である。彼が企図した処、少なくとも1つには明蔵親交策の強化という事が考えられてよいであろうが、彼の時代は明末であり、その統治の万暦44年(1616)、奇しくも云うべきか、4代ユンテン遷化の年が清の太祖天命元年に当るのである。明蔵親交策とは即ち、蒙蔵の離間策であろうが、蒙古の血を引くユンテンの出現は、最早、蒙蔵間にチベット大蔵経の開版という楔を打込むには、既に機を失したとも云えるのではなからうか。このように考えらる時、当時におけるチベット国内の情勢から判断しても、あるいは蒙蔵関係から見ても、明朝による万暦版開版の、こと明朝の

政治的意図に関する限り、その根拠になお不明の点が存すると云えるのではなからうか。

註

- 1) 橋本光宝校訂本, 文聖舎刊: p. 213-p. 215.
- 2) 本学紀要第18集所載, 拙稿参照.
- 3) 上掲本, p. 196-p. 201.
- 4) 江実訳本, 弘文堂書房刊: p. 145-p. 149.
- 5) 漢訳源流, 巻第7.
- 6) 上掲本, p. 226-p. 227.
- 7) 興亜院政務部訳, 生活社刊: p. 257. 殆ど全同の文が“清史, 清史稿”などにもある。これらについては“大崎学報”110号所載, 拙稿参照.
- 8) 上掲拙稿参照.
- 9) 源流によると第4子とある.
- 10) 上掲本, p. 209-p. 210.
- 11) 上掲本, p. 59.
- 12) 上掲本, p. 222.
- 13) 上掲本, p. 57-p. 59.
- 14) 江訳本, p. 133.
- 15) 列伝, 藩部8, 西藏.
- 16) 同上.
- 17) 上掲本, p. 209-p. 221.
- 18) 上掲本, p. 213-p. 214.
- 19) 上掲本, p. 256.
- 20) この王朝は一時, カム地方をも併せて支配し, 蒙古諸汗を外護者とするサキャ派の勢力をも抑え, チベットにおける統一王朝としての態をなした。5代ダライの頃には衰微したが, パグモドゥの諸王がゲルク派を支持した事が, ゲルク派の教勢拡張に大いに与って力あった.
- 21) R. A. スタン著, 山口, 定方共訳“チベットの文化”は4代ダライ治下におけるツァンの首領達とカルマ派の動きにふれている.
- 22) ジグメ上掲本, p. 157.
- 23) このあたりの様子については Tucci “Tibetan Painted Scrolls” Vol. 1, p. 54に詳しい.